

令和 3 年 6 月 24 日現在

機関番号：35313

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18H01002

研究課題名(和文)非認知能力を育成する放課後支援人材養成カリキュラム開発のための基礎的研究

研究課題名(英文)Fundamental study for the development of curriculum to train the after-school childcare instructors who can develop non-cognitive skills

研究代表者

住野 好久(SUMINO, Yoshihisa)

中国学園大学・私立大学の部局等・その他

研究者番号：60243531

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 10,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、学童保育実践における非認知能力育成の現状把握、非認知能力育成の視点を取り入れた新たな学童保育指導員養成カリキュラムの提案を行うことを目的とした。

結果、国内調査を通して、学童保育で育てたい資質・能力を「3つの領域・6つの育てたい子どもの姿・9つの資質・能力」に整理し、その育成状況の特徴を明らかにした。また、諸外国の先進事例の検討を通して、日本の大学における養成カリキュラムには学童保育所と大学、指導員と大学教員とが連携・協働する実習指導を軸にすること、専門性の高い指導員・大学教員による実施体制、学童保育に高い質を求める事業評価制度が必要であることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究で作成した、学童保育で育てたい資質能力の指標「3つの領域・6つの育てたい子どもの姿・9つの資質能力」及び、養成課程における実習指導のあり方に関する検討は、現行の「放課後児童支援員認定資格研修」に不足する内容を補う、新たな現任者研修のカリキュラムの構築に役立つとともに、今後、大学等における指導員養成課程を構築する上でも生かされると考えられる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to (1) understand how much non-cognitive skills are developed in after-school childcare, and (2) propose a new curriculum to train instructors who can develop non-cognitive skills.

As a result, (1) through a domestic survey, the qualities and abilities expected to be developed in after-school childcare were organized into "3 categories, 6 appearances expected to be developed, and 9 qualities and abilities." Then, the characteristics of the current situation in which they are developed were clarified. In addition, (2) through research on advanced training curriculums in other countries, it became clear that what was required for training curriculum in Japanese universities was to focus on practical training in collaboration with after-school childcare centers and universities, and to establish its implementation system with highly professional instructors and university teachers, and the evaluation system required for high-quality after-school childcare.

研究分野：教育方法学

キーワード：非認知能力 放課後児童クラブ(学童保育) 養成課程

### 1. 研究開始当初の背景

女性の社会進出や核家族化の進行に伴い、留守家庭児童が過半数を占める時代が訪れている今日、「学校」でも「家庭」でもない「放課後」の時間に、子どもたちの豊かな生活や活動を保障することの重要性は高まっている。そのような中、2015 年度には学童保育の専門職「放課後児童支援員」の認定資格が誕生したものの、十分な養成内容とは言えないのが現状である。

#### ◆大人主導の「放課後のプログラム型化」

現代の子どもたちの放課後は、図1のように大人主導で多様なプログラムが提供される「プログラム型」と、子ども主導でやりたいことができる「自由裁量型」に大別できる。「プログラム型」の代表はスポーツ、芸術・文化活動、学習等を行う放課後子供教室や民間サービス、「自由裁量型」の代表は放課後児童健全育成事業（以下、学童保育）である。近年「プログラム型」の放課後事業が、日本、そして世界においても急速に拡大する中で「子どもたちの放課後を学校教育の延長の場にしていいのか」「放課後には学校と異なる意義や役割があるのではないか」ということが議論されるようになってきている。

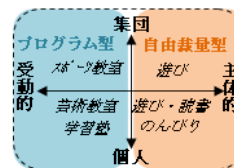


図1 放課後のイメージ

例えば、日本学童保育学会機関誌第7巻の特集では「プログラム型」と「自由裁量型」の実践事例が紹介され、市場化とは異なる多様化の必要性や学童保育の目標の明確化、その内容・方法等の充実の必要性について提起されている。しかし、どのような活動と生活を通して、どのような資質・能力が育まれる場を提供すべきか十分明らかにされていない。

#### ◆放課後に子どもの「非認知能力」を育成する学童保育

このような議論に対し、本研究では「子どもたちの放課後には非認知能力を育成するという独自の意義と役割がある」と考え、学童保育における非認知能力の育成に着目する。というのも、平成26年に示された厚生労働省令「放課後児童健全育成事業の設備及び運営に関する基準」では、この事業の目的を「発達段階に応じた主体的な遊びや生活が可能となるよう、当該児童の自主性、社会性及び創造性の向上、基本的な生活習慣の確立等を図り、もって当該児童の健全な育成を図ること」としている。ここで示されている「自主性、社会性、創造性」は、近年、学校教育や乳幼児保育等で注目されている「非認知能力」として位置づけることができる。主体的な遊びや生活が可能となるような「非認知能力」を育成することこそ、子どもたちの放課後において保障されるべきだと考えたのである。

では、学童保育において非認知能力を育成するためには、どのような専門性をもった指導者が必要なのだろうか、そうした指導者の養成・研修カリキュラムをどのように開発すればよいのだろうか。

### 2. 研究の目的

上記のような問題意識に基づき、本研究では以下の2点を行うことを目的とした。

#### (1) 学童保育実践における非認知能力育成の現状把握

…現状の学童保育においてどのような遊びと生活を通してどのような資質・能力が育まれているかを非認知能力に注目して明らかにする。そのために、子どもの非認知能力の変化を評価するための評価法の開発をする。なお、先行研究では、学童保育における子どもの学びや成長を客観的に評価する研究は皆無である。よって、近年の非認知能力の評価法研究の成果を学童保育領域に応用する研究を進める。また、実践事例の分析を通して、どのような学童保育の環境や保育方法が非認知能力の向上をもたらしているかを明らかにする。

#### (2) 非認知能力育成の視点を取り入れた学童保育指導員養成カリキュラムの提案

…非認知能力を育成できる学童保育指導員を養成するモデル・カリキュラムを開発・検証する。これによって、現行の「放課後児童支援員認定資格研修」に不足する内容を補う新たな現任者研修のカリキュラムが構築できるとともに、大学等における指導員養成課程カリキュラムを構築する際に活用できる。さらに、本カリキュラムは、小学生の放課後支援に携わる全ての人材養成に共通するものとしても、活用できると考えられる。

### 3. 研究の方法

#### (1) 学童保育実践事例の収集・分析、非認知能力養成カリキュラムの明確化

現状の学童保育において、どのような遊びと生活を通して、どのような資質・能力が育まれているのかを明らかにするため、以下の調査・検討を行った。

時期	研究方法
2018年 4-12月	非認知能力等に関する先行研究の検討
2019年 1-3月	放課後児童支援員等による子どもの成長の認識に関する事例調査
2019年 2月19日	X県Z市の学童保育(Bクラブ) / グループミーティング型のヒアリング調査
2019年 3月12日	X県Y市の学童保育(Aクラブ) / グループミーティング型のヒアリング調査
2019年 6月	事例調査の結果を分析し、日本学童保育学会第10回研究大会で発表
2019年 7-10月	学会発表での議論を踏まえ、再度分析作業を行い、「学童保育で育てたい資質能力の指標(案)(以下、「指標案」)」を作成

2019年11-2020年1月	「指標案」の内容検討及び、これに基づく質問項目の作成のための調査
2019年11月25,26日	0県P市の学童保育（Cクラブ、Dクラブ）/事例施設の訪問、ヒアリング調査
2019年1月10,11日	Q県R市の学童保育（Eクラブ）/事例施設の訪問、ヒアリング調査 Q県の複数施設の支援員等によるグループミーティング
2020年1月	上記調査を踏まえ、「学童保育で育てたい資質能力の指標（以下、「学童保育育成指標」）」を作成
2020年2-3月	「学童保育育成指標」をもとにした指導員調査「学童保育（放課後児童クラブ）で育てたい資質能力に関するアンケート」と子ども調査「学童保育のあそびや生活で身につけた力についてのアンケート」の質問項目を検討し、調査票を作成（ただし、新型コロナウイルス感染症感染拡大に伴う一斉休校が生じたため調査を延期）
2020年9-11月	上記、指導員調査と子ども調査の質問紙配布
”	指導員調査配布先：5自治体（A-E市）の指導員で同意を得た200名。
”	子ども調査配布先：4自治体（A-D市）から抽出した学童保育所の小学3-6年生。指導員を通じて調査を依頼し同意を得た267名（3年生134名、4年生87名、5年生53名、6年生22名）。
2020年9-2021年3月	「学童保育育成指標」の構築にかかわる研究成果の公表
2020年12-2021年3月	指導員調査、子ども調査単純集計結果の整理

## （2）放課後における非認知能力育成及びその支援人材養成に関する国際調査

非認知能力を育成できる学童保育指導員を養成するためのカリキュラムを開発するために、諸外国の放課後事業及び放課後支援人材養成の実態について、下記の3か国に関する調査を行った。

時期	調査国	研究方法
2019年3月	スウェーデン	第三者評価機関・ストックホルム大学学童保育指導員養成課程・現場指導員へのヒアリング調査、学童保育現場視察
2020年6月	韓国	韓国の学童保育指導員・学童保育研究者・民間財団職員へのヒアリング調査
2021年2月	ニュージーランド	社会開発省（MSD）・指導員組織・現場指導員へのヒアリング調査、学童保育現場視察

また、以下の資料翻訳を行った。

調査国	翻訳内容
スウェーデン	<ul style="list-style-type: none"> <li>・基礎学校、就学前学級、学童保育所の学習指導要領 2018年改訂版</li> <li>・学習指導要領解説における学童保育</li> <li>・スウェーデンの学童保育統計（2019/20）</li> <li>・ストックホルム大学における学童保育に焦点を当てた小学校教員養成課程（概要）</li> </ul>
ニュージーランド	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ニュージーランドの学童保育制度の概要</li> <li>・社会開発省（MSD）提供統計資料（2018年）</li> <li>・社会開発省認定基準</li> <li>・認定結果通知文例</li> </ul>

## （3）放課後における非認知能力育成及びその支援人材養成のためのカリキュラム開発

スウェーデン、ニュージーランド、韓国の放課後事業及び放課後支援人材の実態を調査・分析してきたこと、及び国内調査結果を踏まえ、日本における非認知能力を育成できる学童保育指導員を養成するカリキュラムの検討を行った。

また、研究成果を広く周知するため、研究成果集を作成した。

## 4. 研究成果

### （1）学童保育実践事例の収集・分析、非認知能力養成カリキュラムの明確化

#### ①「学童保育で育てたい資質・能力」指標の提案

【目的】指導員が認識する子どもの成長とはどのようなものかを明らかにすることを通して、「学童保育で育てたい資質・能力」を捉える指標を構築することを目的とした。

【方法】構造構成的質的研究法をメタ研究法とし、関心相関的にX県Y市の学童保育（Aクラブ）とX県Z市の学童保育（Bクラブ）の支援員を対象としたグループミーティングによるヒアリング調査を実施した。調査期間は2019年1月～3月（上記、3-(1)．研究方法参照）。

【結果】分析の結果より得られたカテゴリーとその語りについて、社会情動的スキルの3要素（「目的を達成する力」「他者と協働する力」「情動を制御する力」と、運営指針における3要素（「自主性」「社会性」「創造性」との関連から解釈を試みた。だが、指導員が認識する子どもの成長のエピソードは、これらの指標では十分に把握することができないことが明らかになった。

そこで、得られたカテゴリーから以下の表1の通り学童保育で育みたい9つの資質・能力を導



出した。

(表1) 学童保育で育てたい資質・能力の指標：3つの領域・6つの育てたい子どもの姿・9つの資質・能力

3つの領域	6つの育てたい子どもの姿	9つの資質・能力								
		1 自信・楽観性	2 自己抑制・省察	3 熱意・意欲	4 主体的行動力	5 協働的志向	6 ケアの志向	7 民主的行動力	8 創造的思考力	9 文化継承
Ⅰ. 自己	①ありのままの自分を受け止め、自己を維持・調整できる子ども	○	○							
	②自ら省察し、自己を変革・向上できる子ども	○	○	○	○				○	
Ⅱ. 他者関係	③他者や物事への寛容さを持ち、その関係性を維持・調整できる子ども	○	○					○	○	○
	④他者や物事を尊重し、その関係性を変革・発展できる子ども	○	○	○	○	○		○	○	
Ⅲ. 文化価値	⑤既存の集団の文化や民主的な価値観を理解し、維持・継承できる子ども	○	○	○	○			○	○	○
	⑥既存の集団の文化や民主的な価値観を批判的に捉え、時には新たな文化や価値を創造できる子ども	○	○	○	○	○		○	○	

## ②学童保育が育成する資質能力に関する量的研究

【目的】「学童保育で育てたい9つの資質・能力」(表1)をもとに作成した子どもによる自己評価の分析を通して、学童保育の遊びや生活を通して子ども自身がどのような力を身につけていると実感しているのか、またその背景にはどのような要因があるのかを検討した。

【方法】子ども自身が自己評価を行えるアンケートを作成し、4自治体から抽出した学童保育所の子どもたちに調査を行った。また、指導員を対象としたアンケート調査も実施した。調査期間は2020年9月～11月(上記、3-(1)、研究方法参照)。

【結果】学童保育の遊びや生活、集団活動を通して、子ども自身が変化を感じている資質・能力は、9つの資質・能力カテゴリの分類によると「自信・楽観性」「自己制御・省察」「熱意・意欲」「主体的行動力」「協働的思考」「ケア的志向」に属する者であった。言い換えると、子どもたちには「文化継承」や「創造的思考力」等の資質・能力に関する成長の実感が相対的に低いということである。したがって、これらの資質・能力は、指導員が意識的に働きかけていかないと子どもたちには自覚されにくいのではないかと推察された。

また、子どもによる自己評価の結果と指導員の育みたい資質・能力との間には齟齬があり、指導員が重視していても学童保育において育てられていない実態や、その逆の実態が確認された。同一クラブ内の結果ではないものの、前者の傾向は指導員の実践力や指導力の課題であり、齟齬を小さくしていくような研修の必要性を示唆している。また後者の傾向はヒドゥン・カリキュラムが機能している可能性も示唆していると考えられた。

## (2) 放課後における非認知能力育成及びその支援人材養成に関する国際調査

### ①ストックホルム大学における学童保育指導員養成課程

【目的】日本の大学における学童保育指導員養成課程の可能性について検討するため、学校と一体的に学童保育を実施し、大学において学校教員と統合して学童保育指導員を養成しているスウェーデンのストックホルム大学における指導員養成課程の詳細を明らかにした

【方法】3-(2)、研究方法参照

【結果】スウェーデンでは、教育に関する専門的な知識、「学習と発達を刺激する」ための実践力、人権や民主主義の価値観を尊重する態度、自他の実践記録、分析、評価、改善する能力等の育成を指導員養成の目標とし、ストックホルム大学の養成課程では「学童保育教育学」と「実習」を軸にした理論と実践とを往還するカリキュラム(図1参照)が編成され、大学と学童保育所とが連携・協働して実習を実施及び評価する実施体制がつけられていることを明らかにした。

1 学期	学童保育教育学Ⅰ (7.5)	教育の歴史と社会における位置 (5)	実習Ⅰ (2.5)	学習と個人の発達の理論 (7.5)	学童保育教育学Ⅰ (7.5)	
2 学期	実技または芸術教科 (15)			学校における法と倫理 (2.5)	実習Ⅱ (5)	学童保育教育学Ⅱ (7.5)
3 学期	学校における社会的関係 (7.5)	学童保育教育学Ⅲ (7.5)		実技または芸術教科 (15)		
4 学期	実習Ⅲ (7.5)	学童保育教育学Ⅳ (7.5)	プレゼンテーションとトリック (3.5)	特別支援教育 (7.5)	教育と学校における評価と開発 (4)	
5 学期	学童保育教育学Ⅴ (7.5)	知識・科学・研究方法論 (7.5)	学童保育教科教授学、カリキュラム論と評価 (15)			
6 学期	学童保育教育学卒業研究 (15)			実習Ⅳ (15)		

図1 スtockホルム大学の学童保育指導員養成課程カリキュラムの全体像

また、日本の大学における学童保育指導員の養成のあり方を検討する上では、「養成目標：教育の担い手か福祉の担い手か」、「保育士養成課程か小学校教員養成課程か」、「養成課程実施体制の確立」「学習成果の評価と養成課程の評価」に関する視点が求められると考えられた。

## ②ニュージーランドのオープン・ポリテクニクにおける学童保育指導員養成課程

【目的】日本の大学における学童保育指導員養成課程の可能性について検討するため、先進事例として学童保育を日本と同様に児童福祉に位置づけ、多様な運営主体による多様な学童保育を容認するニュージーランドにおいてオープン・ポリテクニク（以下、OPNZと略す。）という通信制総合専門学校で行われた指導員養成を取り上げ、その教育内容・課程、教育・学習方法、評価法等を明らかにする。また、このOPNZにおける学童保育指導員養成は2019年度をもって終了してしまったため、その理由についても検討する。

【方法】OPNZの学童保育指導員養成コースのテキストを翻訳し、それを分析した。テキストはOPNZが編集した「4290 Introduction to Out of School Care and Recreation」と「4291 Extension to Out of School Care and Recreation」（いずれも2012年11月改訂版、非売品）である。さらに、ニュージーランドでこのコースの企画・実施に参画したメンバーにインタビューして得た情報も活用した（上記、3-（2）. 研究方法参照）。

【結果】養成教育の内容としては「子ども中心の学童保育実践力」、「コミュニケーション能力」、「行動ガイダンス力」、「安全マネジメント力」の育成が重視されていること、方法としては通信教育の中でオン・ジョブ・トレーニングによる「実習」が位置づけられ、理論と実践の往還ができる学習方法が行われていること等が明らかとなった。そして、2019年度にこの養成課程が終了した大きな要因に資格制度と結びついていなかったことや現場の多様性に対応していなかったことがあること等を指摘した。

### （3）放課後における非認知能力育成及びその支援人材養成のためのカリキュラム開発

【目的】大学における学童保育実習のあり方を学童保育所と大学、現場の実習指導者と大学教員とが連携・協働した実習指導と、学童保育指導員の資質向上と結びつけた実習実施体制に焦点を当てて明らかにする。

【方法】現行の学童保育指導員養成の取組として、放課後児童支援員認定資格研修、児童厚生員養成課程、ストックホルム大学の養成課程の実習について比較・分析した。

【結果】大学における養成課程の中で学童保育所での実習を位置づけること、実習指導者の要件を明示すること、学生・実習指導者・大学教員が連携・協働して実習指導・評価を行う組織が必要であることが明らかになった。その上で、質の高い学童保育実習には、実習で育成すべき学童保育指導員の専門性を明確にしてカリキュラムを編成すること、実習指導者を育成する仕組みをつくること、実習指導者をスーパービジョンできる大学教員を育成することの必要性を提起した。

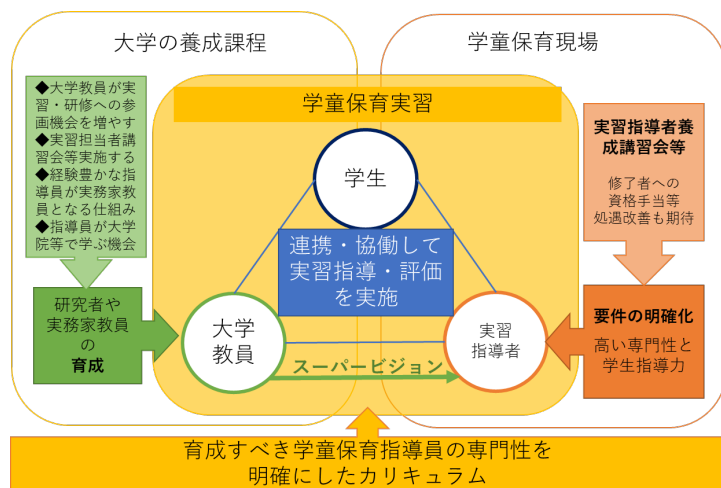


図2 学童保育指導員養成課程に求められる実習指導と実施体制

### （補）質の高い学童保育に必要な事業評価制度

【目的】学童保育に関する監査・評価の仕組みが国レベルで位置づけられており、かつシステムが異なるスウェーデンとニュージーランドにおける学童保育の事業評価の実態を明らかにし、日本との比較することから、望ましい学童保育の質確保のあり方を検討した。

【方法】3-（2）. 研究方法の現地調査及び、資料、先行研究より分析を行った。

【結果】スウェーデンとニュージーランドの事業評価の共通点として見られた、「国の役割としての実施」「明確な基準の文書化」、「定期制」、「評価実施者の専門性」、「罰則と改善支援の仕組み」「結果の一般公表」が構造的な側面や実施運営に関する側面の質が低い現場を管理支援してために必要であることが把握された。また、学童保育実践の質を高めるためには、評価実施者の専門性を高めること、評価項目のチェックだけでなく質の向上に向けた支援員の働きかけや環境構成に関する検討・提案が行われるような評価実施者と、現場との充実した協議の場の保障が必要なこと、事業者や現場指導員が互いに学びあい高め合える仕組みとして、「事業評価」の枠組みだけでなく、研修や、実践検討会などと組みわせることの重要性等が示唆された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計14件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 住野好久・植木信一・松本歩子・中山芳一・鈴木瞬	4. 巻 10
2. 論文標題 大学における学童保育指導員養成に関する研究 ～スウェーデン・ストックホルム大学の養成課程の検討を中心に～	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本学童保育学会編『学童保育』	6. 最初と最後の頁 47-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 植木信一	4. 巻 11
2. 論文標題 今後の児童館の活性化の要因～児童館ガイドラインにおける8種類の活動内容をてがかりに～	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 新潟人間生活学会編『人間生活学研究』	6. 最初と最後の頁 1 - 10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 鈴木瞬・住野好久・中山芳一・植木信一・松本歩子	4. 巻 13
2. 論文標題 放課後児童支援員による子どもの成長の認識 「学童保育で育てたい資質・能力」指標の構築に向けて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 金沢大学人間社会研究域学校教育系紀要	6. 最初と最後の頁 59-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 住野好久・松本歩子・植木信一・鈴木瞬・中山芳一	4. 巻 7
2. 論文標題 ニュージーランドのオープン・ポリテクニクにおける学童保育指導員養成課程の検討 - 大学における学童保育指導員養成に関する研究（その2） -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 奈良教育大学次世代教員養成センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 中山芳一	4. 巻 854
2. 論文標題 教育・授業のキーワード「非認知能力」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 明治図書編『教育科学 国語教育』	6. 最初と最後の頁 44-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中山芳一	4. 巻 45
2. 論文標題 ICTと次世代教育「これからの時代に改めて求められる非認知能力」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 KDDI総合研究所『Nextcom』	6. 最初と最後の頁 22-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 植木信一・住野好久・中山芳一・松本歩子・鈴木 瞬	4. 巻 11
2. 論文標題 大学と学童保育所との連携・協働による学童保育実習に関する研究～大学における学童保育指導員養成に関する研究（その3）～	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本学童保育学会編『学童保育』	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中山芳一	4. 巻 vol.15
2. 論文標題 特集「世代間の学びを考える こども編 生涯の学びを支える土台づくり」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 生涯学習やまがた	6. 最初と最後の頁 2-4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中山芳一	4. 巻 50巻2号
2. 論文標題 メンタルヘルスの広場「これからの時代のために非認知能力を」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 心と社会	6. 最初と最後の頁 116-120
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中山芳一	4. 巻 2019年11月号
2. 論文標題 子どもたちの非認知能力はプロセスの中で！	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 正筆	6. 最初と最後の頁 26-32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中山芳一、吉澤英里	4. 巻 4
2. 論文標題 非認知能力に関する自己評価シートの開発	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 岡山大学全学教育・学生支援機構教育研究紀要	6. 最初と最後の頁 186-195
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18926/58045	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 植木信一	4. 巻 8
2. 論文標題 自治体の放課後児童クラブ運営指針の受け止め方に関する調査研究	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 学童保育	6. 最初と最後の頁 30-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -



1. 著者名 鈴木瞬	4. 巻 44
2. 論文標題 就学前教育と小学校段階における連携の意義と課題	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 学校経営研究	6. 最初と最後の頁 23-31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 鈴木瞬	4. 巻 総合教育技術7月号増刊
2. 論文標題 子どもの放課後と学童保育	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 実践教育法規2019	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 植木信一
2. 発表標題 大学における学童保育職員養成の可能性～職員のスキルアップと現場実習のあり方に着目して～
3. 学会等名 日本社会福祉学会第68回秋季大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 鈴木瞬・住野好久・中山芳一・植木信一・松本歩子
2. 発表標題 子どもが学童保育で身につけた資質・能力の分析 子どもによる自己評価アンケートの分析を通して
3. 学会等名 日本学童保育学会第11回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 松本歩子・住野好久・植木信一・中山芳一・鈴木瞬
2. 発表標題 学童保育における事業評価のあり方に関する研究－スウェーデン・ニュージーランド・日本の比較から－
3. 学会等名 日本学童保育学会第11回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 植木信一・松本歩子・住野好久・中山芳一・鈴木瞬
2. 発表標題 スウェーデンにおける学童保育の質保証の現状と課題 - 第三者評価と指導員の養成に着目して -
3. 学会等名 日本学童保育学会第10回研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 住野好久・鈴木瞬・中山芳一・植木信一・松本歩子
2. 発表標題 放課後児童支援員による子どもの成長の認識 - 放課後児童クラブで育つ非認知能力を捉える指標の構築に向けて -
3. 学会等名 日本学童保育学会第10回研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松本歩子
2. 発表標題 日韓学術交流シンポジウム 学童保育における子ども主体の生活・文化創造と企業による社会貢献活動 「海外の取り組みへの注目と学童保育研究の課題」
3. 学会等名 日本学童保育学会第10回研究大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計9件

1. 著者名 鈴木 瞬	4. 発行年 2021年
2. 出版社 学文社	5. 総ページ数 296
3. 書名 子どもの放課後支援の社会学	

1. 著者名 中山 芳一	4. 発行年 2020年
2. 出版社 東京書籍	5. 総ページ数 224
3. 書名 家庭、学校、職場で生かせる！自分と相手の非認知能力を伸ばすコツ	

1. 著者名 しののめモンテッソーリ子どもの家、中山芳一	4. 発行年 2020年
2. 出版社 東京書籍	5. 総ページ数 144
3. 書名 非認知能力を伸ばすおうちモンテッソーリ77のメニュー	

1. 著者名 岡本正志編著、松本歩子他16名	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 242
3. 書名 『今こそ教育！地域と協働する教員養成』第6章「これからの時代に学童保育が担う役割 - 子どもが主体的生活者となる環境をつくる」	

1. 著者名 住野好久、植木信一、中山芳一、鈴木瞬、松本歩子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 -	5. 総ページ数 199
3. 書名 「非認知能力を育成する放課後支援人材養成カリキュラム開発のための基礎的研究」研究成果集	

1. 著者名 植木 信一	4. 発行年 2019年
2. 出版社 北大路書房	5. 総ページ数 176
3. 書名 新保育ライブラリ子ども家庭福祉	

1. 著者名 一般社団法人日本学童保育士協会、特定非営利活動法人学童保育協会 編 植木信一（第3章）著	4. 発行年 2018年
2. 出版社 日本機関紙出版センター	5. 総ページ数 12
3. 書名 テキスト「学童保育士・基礎」カリキュラム	

1. 著者名 植木信一 編著	4. 発行年 2019年
2. 出版社 建帛社	5. 総ページ数 165
3. 書名 保育者が学ぶ子ども家庭支援論	

1. 著者名 中山 芳一	4. 発行年 2018年
2. 出版社 東京書籍	5. 総ページ数 256
3. 書名 学力テストで測れない非認知能力が子どもを伸ばす	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	植木 信一  (UEKI Shinichi)  (60290061)	新潟県立大学・人間生活学部・教授   (23102)	
研究分担者	中山 芳一  (NAKAYAMA Yoshikazu)  (40595469)	岡山大学・全学教育・学生支援機構・准教授   (15301)	
研究分担者	鈴木 瞬  (SUZUKI Shun)  (00740937)	金沢大学・学校教育系・准教授   (13301)	
研究分担者	松本 歩子  (MATSUMOTO Ayuko)  (10615058)	奈良教育大学・家庭科教育講座・准教授   (14601)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計2件

国際研究集会 日韓学術交流シンポジウムー学童保育における子ども主体の生活・文化創造と企業による社会貢献活動-	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 Gastseminarium med forskare fran Japan om japanska fritidshem - GAKUDOU @Stockholms universitet	開催年 2019年～2019年



8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------